

講会と因明研究

筑 後 誠 隆

日本での因明研究の流れをみてゆくと、「因明入正理論疏明燈抄」にみられるような、「因明大疏」に対する訓詁註釈的な研究から始められた。それに引き続いて、蔵俊の「因明大疏抄」を代表とするような、課題別に問題を設定して解釈を加えるという、課題別研究が盛んになった。この課題別研究が始まったということは、日本での因明研究の目的が変わったということであり、重要視される。

この変化の要因は、研究過程上の難解な点に関して、特に課題として取り上げ考察したという、研究過程上からの力も多分にある。しかし、ただそれだけではなく、法相内明研究に必要であるなどの、外からの必要性も見出すことはできない。

ここで特に注目されるのは、先に例としてとりあげた「因明大疏抄」（大正藏卷六八）の引用文献の一つである、「因明要義抄」である。この「因明要義抄」の名は、「大疏抄」中に十六回でて、その内十五ヶ所で引用されている。内容は何かの課題に対しての問答であり、ほとんどには問者答者の名前と、「山階講時」「宮中講時」などと場所と時とが記されている。

それでは、どのような問題について問答されたのであろう。

「五四四頁」勝論の「声は無常なるべし。眼所見性なるが故に」の因の過について。

「五五六頁」 因の過（特に有法差別相違因と所依不成）について。
「五四四頁」 数論の「我はこれ思なるべし」の宗過について。
「六一七―八頁」 声論の勝論に対する「声は常なるべし。無質礙なるが故に。虚空の如し。」の因過について。
「六三三頁」 「声は無常は声無常に非ず。所作性なるが故に。瓶無常なるが如し」の宗過について。

「六一七頁」 極成の能別について。
「六三三頁」 数論比量の因過について。
「六三五―六頁」 立量する時に、因と喩とを分別するかどうか。
「六五二―三頁」 勝論の五頂に対する「有性は実に非ず。有性は徳に非ず。有性は業に非ず」の三比量の過について。

「六五七―八頁」 三相中の欠後二相について。
「六六二―三頁」 有性についての前の三比量について、慈恩と慧沼の理解の違いについて。

「七〇一―二頁」 欠後二相について。
「七三三頁」 「大疏」中の、猶預不成についての三釈について。
「七四七―五三頁」 至教量について。
「七六七―八頁」 勝論比量の宗過について。

このように「因明要義抄」での問答の内容をみてゆくと、大別すれば二つの内容に分けられる。ひとつは、直接過類についての解釈を問うているものであり、今ひとつは、外数のたてた比量を能破せよという問いである。これらの内容を通して特徴的なのは、過類の研究を含めた為他比量や能破のものばかりであり、因の三相を中心とする為自比量の研究がほとんどなされていない点である。このこ

とは、因明研究の主題が、論理を明確にすることに置かれているのではないことを、しめしている。

それだけではなく、勝論比量や数論比量などの外教比量に、どのような論理的誤りがあるかを探るための、能破に関する問題が多くある。これから考えれば、この因明研究は、けつして論理の明確さの追求となされたのではなく、あきらかに外教批判の一方法として研究された、といつてよいだろう。

それでは、どうして為他比量の研究や、外教批判のための能破の研究が重要視されねばならなかったのだろうか。そのことを考えるまえに、このような問答のおこなわれた、南都の講会で開かれた論議について考えてみる。

南都で最初におこなわれ始めた講会は、のちに興福寺で開かれることになった、維摩会である。この維摩会は、斉明天皇三年（六五七）に、藤原鎌足が山階陶原の自邸を精舎として、齋会を設けたのが始まりである。南都の講会で他に著名なものでは、延暦五年（七八六）宮中において御齋会が、さらに天長七年（八三〇）薬師寺最勝会が始修された。

これらの講会で注目されるのは、そこでおこなわれた論議である。つまり、御齋会での内論議、維摩会・最勝会での豎義と呼ばれるのがそれである。そして、これら論議で解答者（豎義）を経ることによつて、得業と称せられ、維摩会の講師に任せられる資格を得る。そして、承和六年（八三九）の勅により、維摩会の講師を経たものが、御齋会・最勝会の講師を務めることができる、と定められた。さらに、天安三年（八五五）三会の講師を務めた者を僧綱に任ずる、という勅が発つせられたのである。

講会と因明研究（筑後）

このような昇階のシステムが確立されると、当時の学僧達にとつて、論議での豎義を経ることが、非常に大きな課題となつたであろう。そこで当然、各宗派教義の研究もこの論議に焦点があわされたのであろう。

ここで特に重要視されるのが法相教義である。南都六宗の中でも、興福寺が藤原家の菩提寺であつたことも手伝つてか、法相宗が強い勢力をほこつていた。そのようなことから、法相教義が自然に論議の中心課題となつて来たようである。またさらに他宗派よりもはるかに僧綱に占める率も高い。

このように、法相教義の研究が盛んになつてきたのとあいともなつて、その補助学としての因明研究も盛んになつてくる。しかし、法相内明の補助学としての研究態度は変わらず、「清弁比量」などだが、ひとつの課題として研究されたことから考えれば、法相教義以外の教義を破するために、因明研究がおこなわれたと考えるとよいであらう。

以上のように、日本における因明研究は、法相教義の補助学として、外教ならびに他教義批判の一方法として用いるために研究されたと考えられる。また当時の仏教界においては、論議で答者を務めることが非常に重要であり、いうならば一種の試験でもあつたので、そこで出題される因明についても、当然研究が盛んになつた。

しかし、論議で出題される内容は、ほとんどが先に述べたように、外教もしくは他宗教義批判のためのものであつた。そこで、因明研究も、次第に能破のための誤謬論を多く取り扱つた、課題別研究へと移つて行つたと考えられる。